

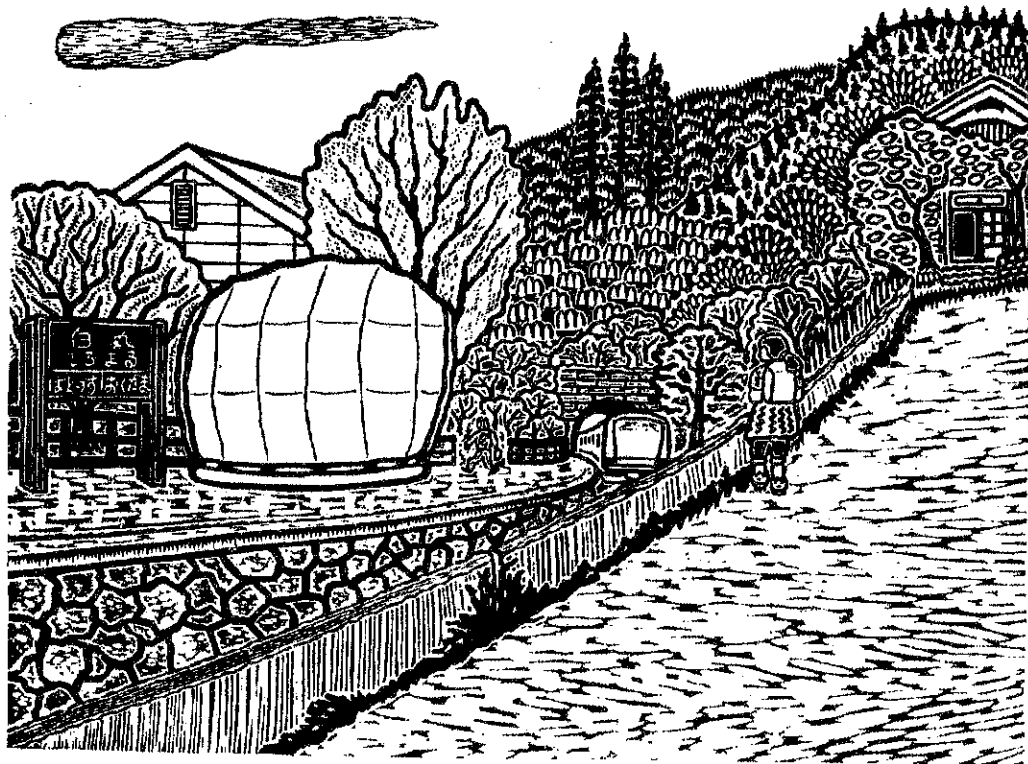
奥多摩の世



奥多摩

《第29号》

平成25年4月1日
奥多摩観光協会



《白丸駅》

木版画 安藤修二

観光協会会長あいさつ

当観光協会は、平成25年4月1日付で一般社団法人として新たな出発点に立つことになりました。先に住民参加による観光ビジョン策定委員会が2年間にわたり協議を重ねて策定した「おくたま観光スピリット21」の提言や、観光立町を目指す町の観光振興策の実現に向けて鋭意取り組んでまいります。

「おくたま観光スピリット21」は、改めて自分たちの足元を見つめることからスタートしました。奥多摩にしかない豊かな自然や人々の暮らしを観光産業として町おこしのエネルギーに変えようというものです。その提言を実現した第一弾が『奥多摩山里歩き絵図・21世紀の宝探し』全22集です。

奥多摩では、これからが春本番です。山里歩き絵図を手に町内21の集落めぐりにお出掛けにな

るには絶好の季節です。さらに、総合ガイド版に掲載の「おくたま自然文化百選」の地にも足を運び、地域の人々との出会いをお楽しみください。

ところで、奥多摩の春一番と言えば、地元でいちばんつつじと呼ばれる「ミツバツツジ」の開花ですが、奥多摩観光行事の春一番は、4月第一日曜日恒例の当観光協会主催の山開き式です。奥多摩駅前の大木戸稻荷神社で山岳救助関係者や山岳会、山歩き愛好者等が集まり、登山の安全と皆様が無事楽しんでいただけるよう祈願します。

なお、山開き式当日に祈願した「登山安全お守り」は、観光案内所の受付にありますのでお申し出ください。あわせて、山里歩き絵図も無料で差しあげておりますのでご利用ください。

(一般社団法人奥多摩観光協会 会長 鈴木賢一)

～ 赤 さ っ せ る ～

奥多摩湖右岸-いこいの路

開催日:平成25年5月24日(金)

このエリアは、東京都の奥座敷として、都民の癒しの空間であり、また、東京都の水源地として重要な存在である。

2000m超級の雲取山をはじめ、御前山、川苔山、鷹ノ巣山、大岳山などの山々に囲まれ、笠取山を水源として東京湾まで138kmの多摩川や、氷川で多摩川と合流する日原川など、山あり溪谷ありの奥深い自然に恵まれている。奥多摩は、登山が主体の観光地のイメージが強いが、素晴らしいフィールドが数多く存在する。

その1つが、いこいの路である。標高550m前後に位置する起伏が少なく、ほど良く整備された遊歩道を歩く全長12km程のコースは、老若男女を問わず、ゆったりと自然観察を楽しみながら散策が出来る。このコースは常に奥多摩湖を右手に見ながら広葉樹林、針葉樹林、高木、低木の入り混じった樹林帯の中をフィトンチッドを全身に浴び

ながら、湖から吹く爽やかな風を感じながら散策できる事である。そして、ゆったりと散策を楽しみながら樹木、草花、野鳥、蝶々などと対話できる。春の草花は、ミヤマキケマン、ムラサキケマン、スミレ類、チゴユリなど。また樹木では、イタヤカエデ、エゴノキ、トチノキ、コゴメウツギ、マルバウツギ、ツクバネウツギ、ミズキなど。このように、多くの樹木が存在するため、昆虫やクモ類も多く、この時期には野鳥(夏鳥、漂鳥、留鳥など)も数多く観察できる。コゲラ、シジウカラ、エナガ、ヤマガラ、カケス、アカゲラ、アオゲラなどの留鳥や、オオルリ、キビタキ、イワツバメ、ツツドリ、ホトトギスなどの夏鳥。そして、稀ではあるが猛禽類のサシバなどに出会えるかも。

さあ、奥多摩いこいの路をゆったりと歩こう。湖からの爽やかな風と緑のシャワーを浴びながら。

(畑 幸夫)

～ 行 っ て 赤 た ゃ ゃ ～

山里歩きシリーズ⑧

— 峰谷・原地区 —

3月のはじめ、快晴の中「山里歩き絵図」の峰谷と原を歩いてきました。

「天界の里」と言われる峰谷ですが、参加者から「奥多摩のマチュピチュだよ」と言われた言葉がとても印象的でした。

峰谷川に沿って歩いてゆくと高台に111年の歴史を閉じた小河内小・中学校があり、どこからか子供達の声が聞こえてきそうです。

ここから10分ほどで金鳳山普門寺に着きます。苔むした階段を上がると本堂と地元の大工さんが造った楼門があり、見ごたえの有る山里のお寺です。

溪流釣場で水分補給とトイレを済ませ、民家の前を通り、杉林のつづら折りの急坂道を登って、やっと「峰の柿」に着きました。秋には可愛い真っ赤な実を沢山つけるそうです。

しばらく舗装道を歩くと谷越えに「奥集落」が遠くに見えてきます。花入神社にお参りし、峰生

活改善センターで早めの昼食をとりました。

いよいよ最後は標高1,000mにあるツガとモミを目指して再び山道をひたすら汗をかきながら登ってゆきます。

やがて標高1,000mの見晴のよい場所に出ます。下から吹き上がる風は疲れた身体には心地よく、絶景ポイントです。参加者から歓声が上がりました。

峰谷は旧小河内地域で唯一水没を免れた集落であり、東京で一番高い集落です。

標高1,000mにあるツガは樹高27m、幹回り3.7m。山で働く人達の信仰木になっているそうです。また近くにはモミの古木があり峰谷全体を上から見守っている感じがしました。

帰りは峰林道をひたすら下り川野の愛宕神社を目指します。火伏の神様にお参りして、10分ほどで峰谷橋バス停に着きました

今回のコースは6時間かけて歩きました。

春の峰谷は一年で最も美しい季節、旬です。

(中里興志江)

～ 「奥多摩四季」 その1 ～

「春を迎える喜び」

私の故郷は、山形県の小国町というところだ。長く登山をしている人なら知っていると思うが、飯豊連峰と朝日連峰に挟まれた登山基地で、名にし負う豪雪地帯だ。今年も3年続きの豪雪で、飯豊登山口の小玉川地区などでは3月が近いのに4近くも積もっているという。

私は高校卒業まで、そんな豪雪地帯で過ごしたせいか、春を迎える喜びが人一倍強いように思う。故郷の友から届いた便りには「雪の下でジッとして春を待つしかない」と書かれてあった。雪国に住む人々は、深い雪の下でひたすら春の到来を待つ。寒い冬をジッと長く耐えた者ほど、春の太陽は暖かく感じるといふ。

故郷にいたころ、春が近くなって花壇の雪を掘り返してみると、真っ黒な土の中から、黄色い水仙の芽がゾクゾクと出ている。あゝ、植物も雪の下で春の気配を感じているのだなと感動し、内なる喜びがこみ上げてきたものだ。

奥多摩も今年の冬は、雪こそ深くはなかったが、寒さが尋常ではなかった。2月後半になっても「この冬一番の寒さ」と天気予報では繰り返していた。

私は奥多摩の春の気配は青梅マラソンから始まると思っている。まだ寒いのが青梅マラソンの声をきくと春に向かうのだな、という気になる。

今年の青梅マラソンは2月17日であった。当日は前日までの強風もおさまり、空も晴れ上がった。私は3月31日をもって、20年間仕事として従事した「警視庁青梅警察署山岳救助隊」を卒業することに決めたので、在任中最後の青梅マラソンを応援してやろうと、水香園前の折り返し点に出掛けた。折り返し点はちょうど日陰になって少し寒かったが、招待選手として走った箱根駅伝の「山の神」と呼ばれた柏原選手も、力強い走りでも折り返して行った。

先頭グループが通り過ぎた後、毎年見られる光景だが、市民マラソンと呼ばれるに相応しく、さまざまに仮装したランナーが駆け抜けて行く。ドラえもんだったりアンパンマン、ピカチュー、顔なしなどに仮装したランナーも含め、1万2000人が折り返して行った。さあこれから奥多摩も三寒四温を繰り返して、暖かい春に向かうのだと思うとうれしくなる。

次の日は雨模様だったが、私は毎年楽しみにしている海沢谷のマンサクの花を車で見に行った。今年は寒過ぎたから、まだ咲いていないかも知れないと

思いながらも、確認してみないと気が済まないのだ。

私の自宅前に植えてある園芸種のシナマンサクは半月も前から咲き出した。花は4数性で萼片、花弁各4枚、おしべも4本ある。花弁は紐状で細長く縮れ、枝に数個ずつ集まってつく。それに比べると自生しているマンサクは花もいくらか小振りで、黄色い花びらも緑色がかっている。私は自生のマンサクの方が好きだ。

海沢谷林道にはまだ雪が残っていた。アメリカキャンプ村を過ぎて海沢トンネルを抜け少し走ると、左の針葉樹林が切れたところの海沢谷に堰堤がある。その堰堤の滝壺に覆いかぶさるように、数本に枝分かれしたマンサクの木が自生しているのだ。近くに車を停めて小雨の中を歩いて見に行った。

果たしてマンサクの花は咲き出していた。まだ満開には早いけど、薄緑がかった紐状の花びらが雨に濡れて光って見えた。私の心は喜びで満たされた。

私の故郷小国でも、まだ雪の消えないうち「先ず咲く」の語源があると言われるマンサクの花や、アブラチャン、ダンコウバイの花などの黄色い小さな木の花が咲き始めるのを見ると、心が喜びに満ち溢れるのだ。

奥多摩でもマンサクの木はところどころに自生している。けっこう大きな木にもなり、枝先にあまり目立たない色合いの小さな花をたくさん付けているので、意識してよく見ていけば発見できる。石尾根の稜線などにも自生しているところがある。山に花の無いこの季節、マンサクは春を一番先に届けてくれる花である。

3月の第一日曜日は奥多摩のヤマメ解禁日である。今年は3日、雛祭りの日に当たった。このヤマメ解禁も私に春を感じさせてくれる言葉だ。太公望は冬の間この日を待ちこがれている。

正午が解禁なのだが、うれしくてまだ暗いうちから動き回る。場所取りもあるだろうが、「ヤマメ解禁」の言葉がうれしいのだ。

この春ただひとつ残念なことは2年ほど前、吉野梅郷付近に梅ウイルスが発生し、2万5000本といわれた梅の木ほとんどが切り倒されたことだ。また何年か経って植え返されることだろうが、元のように梅郷地区が梅の香に包まれるのはいつの日のことだろう。

梅一路御嶽見えたり隠れたり 吉川英治

(元青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

《 冬 の 話 題 か ら 》

裂かれた生木（凍裂の話）

この冬は寒かったですね。そのせいでしょうか、奥多摩町峰谷の浅間尾根においてスギに凍裂（とうれつ）の被害が発見されました。被害と書きましたが、この現象は、樹木そのものには生理的なダメージを与えません。ただ、林業界では、この現象は木材品質を著しく低下させる自然災害として知られています。

凍裂とは、冬季の低温に曝された樹木の細胞内の水分が凍結することにより、個々の細胞の膨張により、幹が縦に裂ける現象を指します。丸太が乾燥によって割れる「干(ひ)割れ」と形状的には同じですが、干割れは水分が失われて起こる細胞の収縮が原因であることに対して、凍裂は細胞の膨張により引き起こされるのです。

昭和30年代後半、大学の林学科に在籍していた私は、「育林学」の授業で「凍裂とは、大気が零下30～40度になった時に発生する。」と教わった記憶があります。ですから、今から30年ほど前、青梅市郊外の人工林での発生が報告された時には、「まさか、関東地方のこんな低地で発生するの？」と驚きました。

今回、仕事仲間が発見して持ち帰った丸太には、明らかにこの冬に発生した割れが見られました。輪切りにして観察したところ、その割れは、真っ直ぐ中心に向かい、ほぼ中心まで達していました。根元辺りでは、中心から数センチのところまで「目回(めまわり)」を起こしていました。目回りとは、年輪の春材部と秋材部の境で同心円状に裂ける現象です。

文献によれば、寒冷地以外における凍裂の発生の多くは、主にスギ、それも湿潤な土地に生育するスギに見られるようです。今回の発見場所も沢状を呈した凹地でした。本来、樹木の中心部（赤身）は周辺部（白太）より含水率は低いのですが、スギにおいては、黒く色づく赤身（黒心と呼ぶ）の場合は含水率が高いのだそうです。凍裂は、そんな黒心を持つスギに多く発生することが知られています。加え

て、スギの材質が、ヒノキなど他の樹木に比べ粘りがないことも原因しているのでしょうか。

樹木は、樹皮に生じた傷口から腐朽菌が入ることを防ぐため、自らの力で傷口を少しずつ塞ぐ戦略をとります。この際に発達するのが「カルス」と呼ばれる癒傷組織で、傷の周辺から組織が盛り上がってきて、最終的には傷口を塞いでしまいます。凍裂の場合は、縦方向に垂直一直線に出来る傷ですので、左右からカルスが発達してきて、塞がった状態では、周辺の樹皮より盛り上がってきます。

今回、ネットでの検索で、凍裂の別名に「蛇下がり」と称する言葉があることを知りました。しかし、この言葉は、凍裂の現象そのものを指すのではなく、盛り上がって上下に連なるカルスの形状（左図参照）から、蛇が幹を下がっている様子を連想して生まれた言葉ではないか、と感じています。



私は、北海道の阿寒湖畔のトドマツで、凍裂の痕跡を数多く見たことがあります。また、多摩川と富士川流域の境にある柳沢峠近くの天然林のブナでも観察したことがあります。樹皮の違いも関係しているのでしょうか、スギとは異なり、トドマツやブナでは、その痕跡がまさに「蛇下がり（蛇登り?）」を連想させる形状となります。

今回、添付するイラストの原画撮影のため、柳沢峠から鷲冠山に向けて歩いてみました。トドマツと同じモミの仲間であるシラビソやウラジロモミに凍裂の痕跡を探してみましたが、目の届く範囲では発見できませんでした。

（堀越弘司）

奥多摩昔語り

奥多摩の年中行事(4)

～正月行事つづき～

《四日 仏の日》

峰畑では、三が日中は仏壇へ供物をしないで、神前へ供えておいた供物をまとめて仏壇へ供えたといひます。日原では、霊神さまへ煮物を供えました。

《五日》

白丸では、水神様の「お日待ち」(おひまち)があり、ヒヨウ仲間がウドンを打って、酒を飲んだといひます。奥多摩地域の木材は、多摩川を利用して流送していました。上流域は管流し(一本流し)で、古里附辺りから下流は筏に組んで送りましたので、搬送が無事に行われるよう水神様を崇めていました。

ヒヨウとは、日雇いの出材夫のことで、奥多摩では、江戸時代から農業の間に日雇(ひよう)取りに出たことが記録されています。

《六日 寒の入り》

けんちん汁を食べる慣わしがありました。けんちん汁は、大鍋で、里芋、ごぼう、人参、大根、豆腐などの具を最初に油で炒めてから調理するので、さめにくく、具に味がしみればしみるほど美味しくな

ります。特に、寒い時期には身体が温まるので、モノ日以外でもつくりました。けんちん汁は、鎌倉五山の第一、建長寺の、建長寺汁がなまったものだとラジオで放送していましたが、広辞苑には、禅僧が中国から伝えた「巻織」(けんちん)という料理がもとになって広まったとあります。いずれにしても、奥多摩町内におけるけんちん汁は、スローフードの代表格といえます。

《七日 七草粥》

春の七草(せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ)の材料を形どおりに使って粥を炊く慣わしは、とうの昔になくなってしまいましたが、青物の出回らない時期に野辺へ出て摘み草をした名残といわれています。

日原の丹生明神(現在の丹生神社)の「やぶさめ祭り」がありました。昔は、家ごとに、三升の麦を出し合ってお祭りの資金に換え、村中の人が集まって甘酒を飲みました。

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

(奥多摩郷土研究会会員 岡部義重)

奥多摩歳時記

奥多摩は民俗の宝庫です。5月5日に行われる二つの行事を紹介します。

*八雲神社の獅子舞

八雲神社は、川井駅から西へ10数分ほどのところにあります。元は、尾張国津島の牛頭天王を勧請したのですが、明治時代に名称変更しています。急傾斜の階段を登り、楼門建て神楽殿の下をくぐると、そこが社庭です。建物の真下中央が参道になっています。特殊構造の舞台と観覧席になっている六段に構築された石崖棧敷は、東京都指定有形民俗文化財に指定されています。

西多摩から埼玉県西部の飯能市方面にかけては、古くから獅子舞があり、地元の人々に支えられ伝統が守り伝えられています。特に川井地区では、新興住宅地に住む人たちが参加して一翼を担っています。

古くから、境集落の白髭神社氏子との交流があり、他の獅子舞を見習うだけでなく、自分たち独自の獅子舞歌を作り演奏しています。

*杣入観音縁日

戦中、川井玉堂が疎開した白丸。白丸駅から西へ数馬の切通しに向かう手前右上に杣入観音堂があります。5月5日は、年に一度のご開帳日です。

『新編武蔵風土記稿』によれば、「十一面観音 弘法大師の作 秘仏にて見ることを許さず」と書かれているほどの貴重な見目麗しき仏様。

大正時代に堂宇再建の折、出開帳という本尊公開方式で資金集めをした記録が残されています。木造金箔立像で左脇に不動明王、右脇に毘沙門天が立っています。

風土記稿のいう弘法大師作はありえないとしても、ともかく江戸時代初期とみられる秀作を奥多摩のしかも、杣入りという由緒ある集落で見ることができます。観音像は、一見の価値ありですが、一見どころか、毎年足を運ぶに十分な十一面観音像と玉堂さん好みの自然環境抜群の地に奥多摩の良さを発見してください。(岡崎 学)

重要なお知らせ

このたび、奥多摩観光協会は、一般社団法人格を取得しました。これを契機に、協会が主催するイベントへの参加を新たに募集する会員に限定することにしました。

会員登録は、最初に参加するイベント当日の入会手続きで行うものとします。

年会費 1,000円として、年5回参加すれば、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券(750円相当)をプレゼントし、6回目の参加費を無料とします。

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、今年度も年間のイベント計画を立てました。本号では、そのうち前半のイベントを一括してお示しします。

すべて、「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。

- ① 4月7日(日) 山開き式と軽ハイク・海沢のカタクリ群落へ
当日は、式典開始時間(8時10分)までに、奥多摩駅前に集合(ハイキング)
- ② 4月12日(金) 山里歩きベストチョイス②
日原方面
応募締切日 4月7日(ハイキング)
- ③ 4月18日(木) でかパン料理と春の花めぐり
(昼食付2,000円)
応募締切日 4月7日(ハイキング)
- ④ 4月25日(木) 奥多摩三山シリーズ①大岳山
応募締切日 4月11日(登山・健脚)
- ⑤ 4月29日(祝) セラピーウォーク(むかし道)
(参加費500円)
9時から11時の間に奥多摩駅前で受付
- ⑥ 5月8日(水) 奥多摩三山シリーズ②御前山
応募締切日 4月24日(登山・健脚)
- ⑦ 5月16日(木) シロヤシオを訪ねて
応募締切日 5月2日(登山・健脚)
- ⑧ 5月24日(金) 奥多摩湖右岸・いこいの路
応募締切日 5月10日(ハイキング)

- ⑨ 5月29日(水) 新緑の六ツ石山
応募締切日 5月15日(登山・健脚)
- ⑩ 6月6日(木) ネイチャーガイド・自然観察
応募締切日 5月23日(ハイキング)
- ⑪ 6月12日(水) 高水山から畠山重忠ゆかりの名坂峠
応募締切日 5月29日(登山)
- ⑫ 6月18日(火) 日原巨樹めぐり
応募締切日 6月4日(ハイキング)
- ⑬ 6月25日(火) 鷹ノ巣山
応募締切日 6月11日(登山・健脚)
- ⑭ 7月5日(金) 山里歩きベストチョイス②
境、中山、原
応募締切日 6月21日(ハイキング)
- ⑮ 7月19日(金) 涼風の海沢三滝めぐり
応募締切日 7月5日(ハイキング)
- ⑯ 7月30日(火) 奥多摩三山シリーズ③三頭山
応募締切日 7月16日(登山・健脚)
- ⑰ 8月8日(木) 山里歩きベストチョイス③
小丹波、棚沢
応募締切日 7月25日(ハイキング)
- ⑱ 8月21日(水) 丹三郎から御岳山の
レンゲショウマを訪ねる
応募締切日 8月7日(登山)
- ⑲ 8月29日(木) 川苔山
応募締切日 8月15日(登山・健脚)
- ⑳ 9月12日(木) 山里歩きベストチョイス④
峰谷、原
応募締切日 8月29日(ハイキング)

募集人員：各回20名

参加費：700円(③と⑥を除く)

次号発行予定：平成25年7月15日

発行：一般社団法人奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会